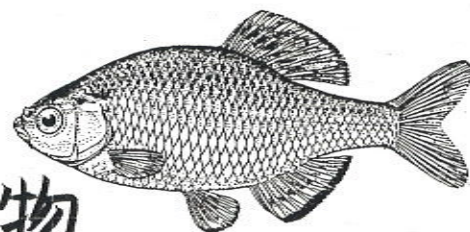


すっかんぽ

9月号

特集、天然記念物

ミヤコタナゴ



おとしの冬だ。国の天然記念物に指定され、現在、千葉県の一部と栃木県の大田原市近辺にしか残っていないとされていたミヤコタナゴが佐野にもいるらしい。その情報が飛びかた。そして、市の教育委員会が中心となって、水鳥川という川をせきとめ、掻き掘りを行った。しかし、結局、ミヤコタナゴは発見できなかったらしい。

ところで、ミヤコタナゴは、明治23年に東京都内で採集され、命名されたもので、文字どおり、ミヤコに住むタナゴで、当時は、いくすでもいたのである。しかし、開発と農業によって、激減し、一時期、絶滅してしまったと思われていた。それが再発見されたのは、あるデパートの淡水魚展のために、畑原の大島博さんが採集した魚の中から、偶然、ミヤコタナゴがまじっていたからである。そして、その採集地が、後に、保護地区になり、同時に昭和49年に、国の天然記念物に指定されたのである。大島さんによる保存活動が始まった時、保護地区には132匹しかいなかったという。

このことは、畑正憲の“天然記念物の動物たち”という本に載っていたことだが、私の祖父に“大島さん、知っている？”と聞いてみると、なんと“よく知っているよ、時々、家におたりに来るよ”というので、さっそく大島さん宅をたずねてみることにした。それは今から6年前、私が東北、黒磯南高校で非常勤講師として生物を教えていた時のことである。魚に興味を示す生徒2人が同行し、生物の時間と、それを報きするという設定でビデオカメラ持参でインタビューを行なったのである。

大島さんは、人なつこいような老紳士で、質問に、いねりに答えてくれた。教壇に立たばかりの私がテレビ取材をきき、カメラを回していたので、それこそうろたえていたが、そのやさしい口調が印象的だった。

大島さんによれば、ミヤコタナゴは、産卵の際に、独特の習性をもっている。つまり、産卵期の4～6月になるとオスは体に色がついてきて、いわゆる婚姻色を示す。一方メスは長い産卵管をだんだんのぼりゆき、マツカサ貝という貝の、エラに管をさしこんで卵を1個づつ入れていく。すると、オスは、そのそばにいて、パッパと精子をかけるのである。エラの中へ卵は、20～30日ほどに9mm程の稚魚となり、エラからでいく。マツカサ貝はそれによって死ぬこともなく、いつみればミヤコタナゴも育つてやるのである。こういった習性があるため、何

よりも卵を産みつけるマツカサ貝もいなくなってしまう。保護地区で、人工の水路をつくり、そこにミヤコタナゴとマツカサ貝を放流することが始まった。全くの試行錯誤だったため、最初の水深が浅くて、シラサギが荒らかり、食べられてしまったこともあったそうだ。翌年は、今まで水源の水を二本の水路に分けていたのを一本だけにし、水深を50cmくらいにしたところ、シラサギが水路を降りられなくなり、さくさく増えたという。記録によれば、保護2年後には、隣の290匹に増え、それに今では一万匹以上を数えるという話であった。帰りがけに、大島さんは、私たちに、”今度は、こういうんじゃない、遊ばないで、さいよ”といってくれた。こういうん、というのが、どういう意味か、最初わからなかったが、後で生徒が、”今度は、ビデオはもってがなりおがりがんべね”と言っているのをきいて、やっと意味がわかった。

あれから、6年の月日がたてられたが、今回の1年の実力テストに、ミヤコタナゴのことを書いてきた生徒がいた。という話をきき、そういえば、もうすけいぶん、いってないな、と思い、先週の日曜、久しぶりにたずねてみた。もちろん、ビデオカメラはもっていないが、しかし、大島さんのお宅へあの、大島さんはいなかった。2年前に、なくなっていたのだ。主として、保護地区は、心なしか、さびれてしまっているようで、さびしかった。悲しいというよりも、さびしい、という感じが先にきた。6年前のころ、家の中には、大島の水そうがおかれ、その中

ミヤコタナゴが泳いでいるのを 指さしながら 説明してくれたものだった。 また 見学の来た人が自由に感想をかくシートなどが 水戸のわきに 何さそつまわっていた。 大島さんは、ミヤコタナゴの 保存のために、すべてを かけていたと見えよう。

生徒とみせたから 何匹か かくてもえなかが と 大島でみたが、"それはできません"と 残念そうに 答えてくれたのを 覚えてる。 その言葉の中に、"あゝ、この人は 本気で とりくんでいる人だな"と思わせる 厳しさが あった。

もう一度 大島さんには、お礼をおきたかった。

奥さんは、"今は、保存会の 会長さんは 平山政寿 さんだから、その人に だけは、なにか わかるが もしも なるかな"と、いい 道を 教けてくれた。 平山さんに 会って 話をしたが、大島さんの ように ミヤコタナゴ に対する 強い 愛情が 感じられた。 たまたま その 辺は 本人も わかっているようで、知っていることを 教けてくれた。

現在も、十数名からなる 保存会が 活動しており、月1回は 草刈りや ちやつりしているという。 また 今年も 淡水産の シジミが 大発生したので、みんな で、たたら、バケツ3はりも あった、という ような 話も して くれた。

それ、この 地区は、大島と 平山という 姓が多い、という 話しか、保存会に、私の 高杉、1年と2年、担任の 平山先生も 入っていて、いじりかやてるといふことだった。 さうと びっくりしたことは、その 平山先生の 家は、その 会長さんとなり の 家だった。

思わぬことに 人の つながりが ありそうだと 感じながらも、大島さんの 遺志が、私の 尊敬する 先生の手によって 引きつがれて いたことが、とても うれしく 思われた。 今度、草刈りでも する 時に、手伝わせて もらえよう と思い ました。



ある日、大島さん
(from "天然記念物の 物知事")

下野 1988.11.27

いる？いない？ ミヤコタナゴ

佐野の水鳥川



水鳥川でミヤコタナゴの生息調査をする調査員ら

【佐野】果たして、佐野のミヤコタナゴは生き残っているのか。国の天然記念物指定を受けているミヤコタナゴの生息地調査が、二十日、佐野の水鳥川で実施された。しかし、この日の調査は、ミヤコタナゴの一種であるヤリタナゴの生息地調査のため、佐野市のミヤコタナゴとヤリタナゴの調査は、別々に行われた。調査は、きょう二十七日にも実施されるが、水鳥川に、一部土地の調査が実施されていることから、生息の可能性は高いとみられている。

佐野市では、かつて西郷地区を流れる水鳥川にミヤコタナゴが生息していたことがあり、四十八年七月に調査されている。しかし、水鳥川が、地盤沈下や、河川改修などにより、水鳥川が、かつての姿に戻っていない。佐野市では、ミヤコタナゴの生息地調査が、きょう二十七日にも実施されるが、水鳥川に、一部土地の調査が実施されていることから、生息の可能性は高いとみられている。

佐野市では、かつて西郷地区を流れる水鳥川にミヤコタナゴが生息していたことがあり、四十八年七月に調査されている。しかし、水鳥川が、地盤沈下や、河川改修などにより、水鳥川が、かつての姿に戻っていない。佐野市では、ミヤコタナゴの生息地調査が、きょう二十七日にも実施されるが、水鳥川に、一部土地の調査が実施されていることから、生息の可能性は高いとみられている。

佐野市では、かつて西郷地区を流れる水鳥川にミヤコタナゴが生息していたことがあり、四十八年七月に調査されている。しかし、水鳥川が、地盤沈下や、河川改修などにより、水鳥川が、かつての姿に戻っていない。佐野市では、ミヤコタナゴの生息地調査が、きょう二十七日にも実施されるが、水鳥川に、一部土地の調査が実施されていることから、生息の可能性は高いとみられている。

生息調査で
確認できず